

# オック語のプロパロキシトン起源の二重母音について Diftongs dels proparoxitons latins en occitan

多賀 吉隆

Yoshitaka TAGA

## 0 はじめに

ラテン語で語末から3番目に強勢をもつプロパロキシトンの強勢母音が、オック語では降下二重母音で現れることがある。例えば、CÁDERE > caire “落ちる” のようにである。伝統的な説明は、子音の消失による<sup>1)</sup>。しかし、前考で示したようにオック語においては、プロパロキシトンでは語末から1番目の母音の消失か、2番目の母音の消失が起こることが多い<sup>2)</sup>。実際、この例でも、最後の母音の消失による càser という形がある。

本考の目的は、このような降下二重母音は語中音消失による子音連続の第1成分が母音化されることによることを示し、さらにそこからそのような変化を許す音節の構造を探ることである。

なお、均質性を保つため、できる限り現代オック語のラングドック方言を資料とし、新語でないことを確かめるため古オック語を援用した。これは個々の語に現れる特異な現象を研究するのではなく、システムとしての変化を探るためである。

また、簡便のためラテン語の単語は SMALL CAPITAL で表し、オック語の単語は roman 体で表す。特に必要がない場合、音韻表記を行わず、書記法はオキシタニストの正書法による<sup>3)</sup>。

## 1 記述

分析の対象とする音韻変化は次のとおりである。ただし、添え字は区別のためであり、音素の個数を意味しない。

$$(1) \quad -\acute{V}_a C_a V_b C_b V_c \left( \left\{ \begin{array}{c} M \\ S \end{array} \right\} \right) > -\acute{V}_{a'} \left\{ \begin{array}{c} y \\ w \end{array} \right\} C_{b'} \left\{ \begin{array}{c} a \\ e \end{array} \right\}$$

$C_a$  が唇音でない場合、この変化が起こるのは  $C_b$  が流音に限られる。 $C_a$  が唇音の場合、流音以外でも起こる。そこで  $C_a$  に調音位置によって分けて例をあげる。

### 1.1 $C_a = P, B, V$

$C_b$  が R で  $C_a$  が B, V の場合、二重母音が現れる。例えば、BĪBĚRE > beure “飲む”, VĪVĚRE > viure “生きる”, RŌBŌREM > roire “フユナラ”である。 $C_a$  が P の場合、適切な例は見つかっていない。近い形に PAUPĚREM > paure “貧乏な”があるが、これは古オック語の異形 paubre やガスコーニュ方言の paube から考えると、通常の語中音消失による \*paubre から二重母音のせいで b がさらに消失したのであろう。そこでこの場合、 $V_a$  が単母音であれば二重母音があらわれない可能性もある。

$C_b$  が L の場合、問題は複雑になる。

前考で示したように語末の母音が A であれば通常語中音消失が起こるが、ここでは、FĀBŪLAM > faula “話”, TĀBŪLAM > taula “卓”, のような形がえられる。NĚBULAM > nèbla “霧” のような例もあるが、二重語に nèula “雲”がある。なお、 $C_a$  が P, V の例は見つけていない。

語末の母音が他の場合、HĚBŪLUM > èule ~ èvol “ニワトコ”のように語末音消失を起こす形の傍らに二重母音をもつ形がある。しかし、多くの場合 -VĪBILEM に由来し、-Vble の形になる<sup>4)</sup>。例えば、FĚBĪLEM > feble “弱い”, NŌBĪLEM > nòble “貴族の”である。

$C_a$  が V の例は見つけていない。P の場合、PŌPŪLUM > pòble “人々”, PŌPŪLUM > píbol “ポプラ”と二重母音が生じない。

$C_b$  が流音でない場合、見つかった確かな例は T に限られる。DĚBĪTUM > deute “借金” CŪBĪTUM > coide “肘”などである。しかし、\*SABBĀTE > sabde “土曜日” SŪBĪTUM > sobte ~ subte “突然”がある。後者にはプロヴァンス方言に sobde “早い”がある。前者は重子音のためと考えられるので、後者も何らかの原因（例えば音象徴）で重子音化されたのであろうか。

$C_b$  が D の場合、CŪPĪDUM > cobe “欲深い”のように通常語末音消失をする。しかし、不確かな例としてセヴェンヌ (Cévennes) 方言に RAPĪDUM > raide “速い”がある<sup>5)</sup>。

### 1.2 $C_a = T, D$

この場合、 $C_b$  が R の場合に限られる。

$C_a$  が D のとき、通常、語末音消失する形の傍らに二重母音を生じる形がある。例えば、CĀDĚRE > caire ~ càser “落ちる”, VĚDĚRE > veire ~ véser “見る” HĚDĚRAM > èura “キツタ”, である。OCCĪDĚRE > aucire “殺す”の場合、ガスコーニュ方言に、auciser の形があるので、\*/ausíyre/ の形に遡るのではないだろうか。

$C_a$  が T のときも、普通は、\*CANTATOR/CANTATOREM > cantaire/cantador “歌手”, の

ように二重母音を生じるが, SUCCŮTĚRE > secodre “揺さぶる”, B'ŮTYRUM > burre “バター” のような例外もある。前者は活用形の影響であろう。後者はギリシャ語起源で例外的な形である。

なお, ラテン語における TR の子音連続も PATREM > paire “父” のように二重母音を生じる。

さて, C<sub>b</sub> が L の場合, MODULUM > mòtle /mòlle/ “型”, RŮTŮLUM > ròtle “役割” のように重子音化される<sup>6)</sup>。これは調音点が同じためと考えられる。

### 1.3 C<sub>a</sub> = C, G

C<sub>b</sub> が R の場合をまず考える。

語末音消失する形の傍らに二重母音を生じる形がある。例えば,

NŌCĚRE ~ \*NŌCĚRE > nòire ~ nòser “害する” である。後者はフランク語に遡る。また, DĪCĚRE > dire ~ díser “言う” の例は, 先の aucire の例と同様, \*/díyre/ の形に遡ると考えられる。

C<sub>b</sub> が L の場合, C<sub>a</sub> が G であれば二重母音が生じる。TĚGŮLUM > teule “屋根”, のようにである。

C<sub>a</sub> が C であるとき, 硬口蓋音が生じる。例えば, ĀPĪCŮLAM > abelha “蜂”, PĚĪCŮLUM > perilh “危険” である<sup>7)</sup>。しかし, SĚCŮLUM > sègle “世紀” のように単なる語中音消失による場合もある。

## 2 分析と考察

前節での記述をもとにこの二重母音の発生の過程を推定する。

私は次の規則によって二重母音が生じたと考える。

$$(2) \left[ \begin{array}{c} C \\ -\text{stop} \end{array} \right] > \left[ \begin{array}{c} V \\ -\text{syllabic} \end{array} \right] / \acute{V} \_\_\_\_\_\$$$

つまり, 二重母音の第2成分が, 強勢を持たない母音の消失により生じた子音連続の第1成分に由来すると考える。

まず, 他の考えに反証し, その後に補完する証拠をあげる。。

### 2.1 別の考え

#### 2.1.1 子音の消失と母音の半母音化

$$(3) \quad -\acute{V}_a C_a V_b C_b (V_c) \left( \left\{ \begin{array}{c} M \\ S \end{array} \right\} \right) > -\acute{V}'_a \emptyset \left[ \begin{array}{c} V_b \\ -\text{syllabic} \end{array} \right] C_{b'} \left\{ \begin{array}{c} a \\ e \end{array} \right\}$$

しかし、この変化では、子音の弱化の程度が問題になる。

フランス語や北の方言とは違い、南の方言では  $C > \emptyset$  のような変化はあまりおこらない。一部の方言で、

$$(4) \quad G > \emptyset / V \text{---} \left[ \begin{array}{c} V \\ +\text{back} \end{array} \right]$$

のような変化があり、プロヴァンス方言のローヌ川流域の方言で AGUSTUM > aost ~ avost “八月” などがある。

しかし、通常は、

$$(5) \quad \left[ \begin{array}{c} C \\ +\text{stop} \\ -\text{voice} \end{array} \right] > \left[ \begin{array}{c} C \\ +\text{stop} \\ +\text{voice} \end{array} \right] > \left[ \begin{array}{c} C \\ -\text{stop} \\ +\text{voice} \end{array} \right] / V \text{---} V$$

という規則に従った弱化をする。この後の変化は

$$(6) \quad \left[ \begin{array}{c} C \\ -\text{stop} \\ +\text{voice} \end{array} \right] > \begin{cases} \emptyset & / V \text{---} \# \\ [+strident] & / V \text{---} V \end{cases}$$

である。例えば、CŪPĪDUM > \*/cóbeð/ > cobe となり、一部の方言の女性形では \*/cóbeða/ > \*/cobéða/ > cobesa のようになる。

したがって、(3) に従うとすると、特定の環境で子音が非常に不自然な弱化をしたと考えなければならない。

また、二重母音の第2成分が何になるかという問題もある。これは RŌBŌREM > roire, DĚBĪTUM > deute のように  $V_b$  によって決まらない。後で詳しく述べるようにほぼ子音によって決まる。

### 2.1.2 母音のワレ

次に、下の規則による強勢母音のワレという考えに反対する。

$$(7) \quad -\acute{V}_a C_a V_b C_b (V_c) \left( \left\{ \begin{array}{c} M \\ S \end{array} \right\} \right) > -\acute{V}'_{a'} \left\{ \begin{array}{c} y \\ w \end{array} \right\} \emptyset C_{b'} \left\{ \begin{array}{c} a \\ e \end{array} \right\}$$

一般に南のオック語では母音が割れない。割れるのは、硬口蓋音の前に限らる。例えば、OCŪLUM > olh > uelh “目”であるが、OLIUM > òli “油”である。それ以外では、PĀREM > par “同じな”（フランス語 pair）のように母音が保たれる。PATREM > paire “父”（フランス語 père）のような例では本考で考察している音形と同様な変化をたどったと考えるべきである。

また、例えば、A > ai, au のように2種類のワレを考えるのも不自然である。

## 2.2 子音の半母音化

そこで、(2) による子音の母音化が起こったと考える。

オック語では、他の位置でも子音の母音化が行われているので、この規則は不自然ではない。

まず、語尾の例をあげる。この位置で母音化されるのは、B, V がほとんどである。例えば、SCRĪBĪT > escriu “(彼/彼女が) 書く”，NĀVEM > nau “船”である。他の子音では、例外的であるが、ILLAC > lai “そこ”，ECCE HAC > sai “ここ”がある<sup>8)</sup>。

次に、すでにラテン語で子音連続であった例をあげる。TR, DR の場合、VITRUM > vèire “ガラス”，QUADRUM > caire “隅”などがある。これについては本考と同じ過程と考えられる。他の子音連続では、PT の場合、CAPTĪVUM > catiu ~ cautiū ~ caitiu “惨めな”となる。また、CT の場合、一部の方言で、FACTUM > fait になる<sup>9)</sup>。

また、二重母音の第2成分はほぼ子音によって決まる。

B, V の場合、LĪBĒRUM > liure “自由な”，BĪBĒRE > beure, \*MŌVĒRE > mōure “動く”，DĒBĪTUM > deute とほとんどの母音の後で /w/ で現れるが、RŌBŌREM > roire, CŪBĪTUM > coide の例がある<sup>10)</sup>。これは、/o/ ([u]) と /w/ が近いいため異化が行われたと考えられる。

T, D の場合、RĀDĒRE > raire “髭をそる”，VĒDĒRE > veire, FŌDĒRE > fōire “穴をあける”，RŌDĒRE > roire “かじる”のように /y/ が現れる。例外は、HĒDĒRAM > èura “キジタ”であるが、この語は èdra, èbra, èudra, èuna のような異形が多く、特異な変化と考えられる。

G の場合、例が少ないが、TĒGULUM > teule のように /w/ が生じている。

最後に残っている (2) に対する問題は、TR, DR, T'R である。つまり、子音の通常の弱化の規則から考えると、このような場合、\*/dr/ がえられ、この規則への入力となりえないのである。

しかし、T, D も R も舌先を音なので、

$$(8) \begin{bmatrix} C \\ +\text{dental} \\ +\text{stop} \end{bmatrix} > \begin{bmatrix} -\text{stop} \\ +\text{voice} \end{bmatrix} /V\_\_\_\_\_\_rV$$

という変化は自然である。

### 2.3 理論的問題と今後の課題

今まで述べた理由から、二重母音の第2成分は子音起源であると考えられる。

例えば、VĒDĒRE > veire での変化は、

$$(9) \text{VĒDĒRE} > */\text{véðere}/ > */\text{veðre}/ > /\text{veyre}/ = \text{veire}$$

と考えられる。

/veyre/ では、/vey\$re/ のように音節が分けるのが自然であり、/ve\$yre/ という分け方は不自然である。

ところが、\*/veðre/ の段階ではどこで音節が区切られるかが問題になる。

オンセットの部分を最大にすると、\*/ve\$ðre/ のような分け方になる。しかし、子音の母音化がおこるためには、母音とのより密接な関係が必要である。つまり、\*/veð\$re/ という分け方になる。

したがって、強勢母音に続くオンセットの部分に  $\begin{bmatrix} C \\ -\text{stop} \end{bmatrix}$  C という連続が許されないことがあったと推定される。

本考の出発点は、前考に引き続き次の疑問であった。

(10) 実際の発音の単位は音節であるのに、なぜ音節の核である母音だけが消失するのか。

この疑問に対し、私は特定の環境においての最大コーダ原理を必要とする次のような作業仮説をたてている。

$$(11) \begin{bmatrix} V \\ -\text{tense} \end{bmatrix} > \emptyset / \$ \_\_\_\_\_\_ \$$$

しかし、残念ながら今回えられたのはオンセットに対する制限だけである。今後さらに母音の消失の周辺を研究することで (11) の可否を追求したい。

## 【注】

- 1) 例えば, Anglade(1921: p.111) は, TĒGULUM > teule を /g/ が消失したことで説明する。
- 2) 多賀1995。
- 3) 例えば, Lafont1971。
- 4) 下の PŎPŪLUM > pòble や \*SABBATE > sabde から考えると, -V̄BILEM > \*-VBBILE という変化があったのかもしれない。
- 5) RAPĪDUM > \*rabe /rábe/ という変化が考えられるが, 何らかの派生語と考えられる rabeg /rabéč/ “急流” という形しかない。rabejar “洗う” という関連語との派生関係は今のところ不明である。
- 6) tl の t は実際の歯音を表さず, 重子音の印である。この場合, /ll/ と発音される。
- 7) lh は /λλ/ ~ /λ/ のように発音される。h は硬口蓋音の印であり, ch /č/, nh /ñ/ のように使われる。  
なお, この硬口蓋音の由来を FACTUM > \*/fayte/ > fach “事実” という想定されている変化にならって, /yl/ > /λ/ とは私は考えていない。/yt/ > /č/ という変化自体に疑問を持っているが, 別考にゆずりたい。
- 8) VADO > vau “(私が) いく” の例もこの場合と考えることもできる。D が消えたと考えると子音の弱化の程度から不規則である。
- 9) CS > /ys/ の変化が, EXIRE > eissir などで行われたと考えることもできるが, SC でも COGNOSCERE > conóisser であり, SEX > sièis と母音が割れているのでこれには私は反対である。
- 10) ÁBVCV の例は見つかっていない。ラテン語の BR では一部の方言で, FABRUM > faure “鍛冶屋” があるが, 多くの場合, fabre である。

## 【参考文献】

- Alibert, Louis. (1965) *Dictionnaire occitan-français*, I.E.O.  
Anglade, Joseph. (1921) *Grammaire de l'ancien provençal*, Klincksieck.

- Bec, Pierre. (1973) *Manuel pratique d'occitan moderne*, Picard.
- Chomsky, Noam and Morris Halle. (1968) *Sound Pattern of English*,  
Harper and Row.
- Fourvières, Xavier de. (1975) *Lou Pichot tresor*, Aubanel.
- Jakobson, Fant et Halle. (1956) *Preliminaries to Speech Analysis*
- Kenstowicz, Michael. (1994) *Phonology in Generative Grammar*, Blackwell.
- Lafont, Robert. (1971) *L'Ortografia occitana*, C.E.O.
- (1972) *L'Ortografia occitana: lo provençau*, C.E.O.
- Levy, Emil. (1973) *Petit dictionnaire provençal-français*, Carl Winter  
Universitätsverlag.
- Lausberg, Heinrich. (1965) *Lingüística románica: fonética*, Gredos.
- Mistral, Frédéric. (1932) *le Trésor du Félibrige*, Delagrave.
- Nouvel, Alain. (1975) *L'occitan sans peine*, Assimil.
- Zink, Gaston. (1989) *Phonétique historique du français*, P.U.F.
- 多賀 吉隆. (1995) 「オック語におけるプロパロキシトンの解消について」,  
『ロマンス語研究』28. pp.77-86.